

～～～海洋島～～～

第5巻 第1号 (通巻 38号)

東京都小笠原水産センター

東京都庁総務局小笠原支庁

2003年 4月 18日発行

〒100-2101 東京都小笠原村父島字清瀬

04998-2-2545

Fax. 04998-2-2546

小笠原水産センター設立 30周年

小笠原水産センター初代赴任記

堤 清樹

小笠原水産センターは本年で、設立から30周年となったと米山所長から電話を受け、感慨深いものがありました。私が小笠原に着任したのは昭和48年4月25日と記憶しています。倉田所長(当時)は私より1便遅れの赴任、新採で配属になった小泉研究員は新任研修の後の6月初めの赴任でした。庁舎は赴任した当時は、基礎と柱の鉄筋があるだけという状態で、47年度の予算だから完成しているはずとの職場の声をそのまま信じて赴任した私には大きなショックでした。

開所式はその年の7月7日、関係者を招待して開催しましたが、トイレは下水管本管と接続していないため使用禁止。また、電力が不足していたためエアコンが入れられず、式典に参加した人々の発する熱気と、小笠原の夏の気温とが重なったため、狭い室内は異常な暑さとなり、気分を悪くする人も続出する有様でした。そうこうしている内にトイレも使用できるようになり、7月末には、机を置かせてもらっていた支庁産業課から、水産センターに引っ越し、本格的に業務を始めました。

「漁業取締り」専用船として活動していた先代の「興洋」(全長18m、予算の都合で設計より1ランク下のエンジンを積んでいたため、高速艇の船型ながら10ノットしか速力が出なかった)で、漁業取締り、海洋観測、底魚漁場探索、曳縄調査等を乗組員と相談しながら組み立てていきました。底魚漁場は二見港に寄港した他県船から聞いたり、海図からヒントを得たりしながら探索し、いくつかは新しい底魚漁場を見つけ、地元漁船に利用してもらいました。また、18の観測点を決め、BTという水温観測機器を使って、毎月1回の海洋観測を始めました。BTは当時の私の給与の半年分と高額でしたので、海没しないよう、兄島滝之浦湾で上げ下ろしの練習をしたことを覚えています。また、あまりにも海水が透明なので透明度板に備え付けの50mロープでは足りず、紐をつぎ足して計ったこともありました。

全ての調査の様式を水産試験場から持ってきた観測の手引き、

調査野帳などを参考に作っていました。当時は予算がなく、工用の鉄パイプを貰ってきて、水産センター前の海底に打ち込んでカメの畜養池や産卵場の造成をしたり、工事で余ったU字溝とゴムシートを貰ってきて、稚亀の飼育池を作ったりしていたため、貧乏センターなどと言う人もいました。

住宅は、米軍が残したハウスや新築の公舎でしたが、足りないので1部屋に2人入っている所もあり、単身赴任や、独身者も多く、合宿所に近い雰囲気は漂っていました。また、電話は昼間4回線、夜2回線だったので、一級という優先して繋いでくれる電話でも、内地へは2時間待ちなど普通のことでした。特に母島は最初電話がなかったため、父島まで電話をかけに船で来て、海がシケたため1週間帰れなかった職員もいました。

その他に思い出深いのは母島との運搬船を「興洋」で行ったことです。支庁港湾課に「おがさわら丸」という50トンの平底ボートがあり、工事監督や母島との連絡船をしていましたが、その船がドックのため小笠原から不在になる1月半位「興洋」が代わりを務めました。最初の年は「乗船の受付」までやったため、夜、宿舍まで来て「乗せてくれないと工事ができない」と建設現場の人に怒鳴られたりすることもありました。船の運航を担当していて夜、布団の中で涙が出てきたこともありました。「何でもありの小笠原」でした。(現東京都水産試験場八丈分場長)



昭和48年5月 建設中の水産センター